

松の樹

森から声がした
涙の枯れた彼女の名を呼ぶ声が

さぐりあててみれば

それは森の奥の空き地の傍（かたわ）らの
老いた松の樹

疲れた背をもたせかけた彼女に

ごつごつの皮越しのささやきが聞こえてきた

——ここへおいで

わたしと一緒に暮らさないか

女は幹へと溶けこんで

二人は夫婦になった

夫がかつて囚（とら）われた

前妻の誘惑の昔語りをききながら

老いた根から彼女は滋養を吸い取り

陽の光を浴びて葉を茂らせた

何度めの春を迎えたあとだったろう？

老夫の声がいつのまにかしなくなった

彼女はひとり

枯れ葉を踏む足音に目を向ければ

いつかの彼女のように

そぞろ歩きする影

白いものの混じる髪に眼の下をたるませた男には

かつて彼女をはねつけたおもかげ

梢をゆらしそつと風を送ってやろう

かたわらの少年の髪がそよいだ

——呼んでみよう

季節が過ぎて

少年が

想い人と同じ広い額と細い鼻の少年が
彼女の声を聞いた

——ここへおいで

わたしと一緒に暮らそう

そして女は

想い人の息子と

一つになった